文字は印度自国にも消滅せりとか遺憾の至りです。貝葉二枚を某氏より貰ひ受けて所持して居りますが、悉曇学者にも其が読めません。現今パーリー語の経文の断片なり。是を思ふにつけても安然和尚の弘法大師の所用せし梵字に付てボタボージは一字転声と論定す杯は精学の人と敬意を表します。菩提心論の三摩地の章句中に於ける義意の阿字五転の解釈を、法華経の開示悟入と合義し総結するに具足成就の詞を以て底意は真言が善巧智円満なりと云ふが如きは、其の間の研究を要する点なるべし。換言せば大日経疏の妙法蓮華経の最深秘処文と此の、三摩地の勝義浅深、或は異同論などは能く精研を要する次第です。是れ私が私見と題せし所以です。由来真言の流伝は鉄塔開放するや西蔵ビルマ等に発展し、祈禱、呪術風の事多分に混和せられて、更に秘密てう文字に覆蔽せられしと云ふ説を信用、無理ならぬでしよう。されば天竺の純粋の真言も或は迷妄狂惑的に近き事もあるべし。野衲は餘命短縮來生を待つの外なければ。当学院の篤志の御方に研究を切望します。已上愚見駄辯大いに清聽を汚がしました。是にて笑却々々。

日蓮聖人書入本「註法華經」の版經について

兜木正亨

本年（昭和二十七年）七月十三日附で、玉沢妙法華寺藏の日蓮聖人書入本法華版経が重要文化財に指定されました。これまで、多くの先師方がこの註法華経の版経はどういふ系統の版かといふことを究明しようと、熱心に研究してこられたようでありますが、何版であるかは遺憾ながら、まだ判定されてはゐません。重要文化財指定のときの解説書には、本経版は叡山版であると書かれてありましたが法華経版に叡山版はありません。おそらく山家本すなはち叡山版と見られたのかと思ひますが、これは成立しない説です。

註法華経の書入文字は、その書風から見て、お若い頃の筆蹟は見られず、聖人壯年期以後の御筆と拝見せられ、大体弘長年間以後のお書入であらうと推察されます。右のように見て本経版は弘長以前に開版された版経でなければなりません。

法華版経で弘長以前に開版された遺例では刊記本では嘉祿元年（聖人生年四歳）弘春版があり、ついで弘長三年（聖壽四二歳）心性第四度版があつて、いづれも春日版法華経です。年号を書入れた奥書本では、ずつと古く承暦本があり、法華経八卷または開結を具した十卷本摺写の文献は、これより遡つて寛弘

六年以降たくさんの記録があります。これらは摺経とよばれてゐます。しかし、藤原時代の法華版経は、鎌倉時代のそれと版式が違つてゐます。註法華経の版式は春日版ですから、鎌倉時代に大和で開版された版経です。鎌倉時代はわが国版経がもつとも盛んに行はれ、技術的にも最も進んでゐた時代で、版経の全盛期であつたのです。春日版法華経。さきに云つた弘睿版と心性版があり、いづれも聖人御在世中に行はれてゐた版経ですまえに刊記本といふことを云ひましたが、刊記本といふのは、何年何月に某がこの版を開いたといふ趣旨のことを版木に彫刻した版本をいふのですが、註法華経には、その刊記は摺り出されてありません。これは版木に本文と同じやうに陽刻してあつても、その部分を故意に摺らないことがあるのですが、註経を摺写した版木には刊記が有つたのか無かつたものか、何れにしても巻末餘白は十分あるに拘らず、刊記はありません。しかしその版面から見て春日版であることには相違ありませんから、同じ鎌倉時代に開版された鎌倉での開版かと思はれる称名寺胎内本版法華経とも相違し、高野山にその遺品の現存する実遍本版法華経とも違つた版であります。そうすると、註経と同種の版は弘睿版か、心性版のどれかではないかといふことになります。

そこで、弘睿版と註経の版を比べてみますと、版面の大きさ字劃なぞ非常によく似てゐますが、同じ版ではありません。つぎに心性版ですが、心性版については少しく説明を加えてをかねばならぬことがあります。現在、心性版の遺品の知られてゐる版は第四度版が初めで、弘長三年に開版された版ですが、これが第四度目の版ですから、現在知られてゐない版が、この前に三度開版されてゐるのです。このことを証する資料は何も見当らないのですが、心性版は現在、第四度版のほかに第五度版第六度版、第七度版、第十度版、第十四度版、第十五度版の遺品が伝へられてゐます。第一度、第二度、第三度、第八度、第九度、第十一度、第十二度、第十三度の十五度中の八版は伝本の所在がわかりませんが、現存の第十五度版までの中の七版を比べてみますと、よく似てゐますが、皆版木を新らしく作つて摺写した別版であることは確かです。この別版の現存本から推察して、他の版も皆別版で作られたものとみてよいものと考へられます。現存本を見ますと覆刻版で、巻八巻末の刊記年号と度数、彫師の名が新らしくなつてゐる程度です。今まで広く知られてゐませんが、心性は法華版経を全国的に普及させた偉大な恩人です。一版の法華経の版木を作るのには、大体一人の彫師がこれに専門にかゝつて約三ヶ年を要した仕事です。その費用は三年間の日当だけでも莫大です。これを平均年数にして九年と四ヶ月の間隔を置いて、くりかえしくりかへし版を新刻したことを考へると、心性の法華経普及の熱願のほどがうかゞえます。心性の法華開版の趣旨は護持正法と利樂有情を発願し、

盡未來際を盡くして、法華の版木を彫置かん、庶くは衆人摺写して広く諸国に流布し、互に興法利生し、自他共に咸佛せん、といふのですから、一山一寺の読誦の用にすることをいふやうな小さい目的や私ごとの開版ではなく、開放的な全国的普及を目的として、誰にでもこの版木で法華経を摺ることができたと思はれる趣旨が心性版のどの版にも刻記してあります。しかも一版で、二、三千部は鮮明に摺写できるのですから、一版三千部として十五版で四十五万部の法華経が刊行されたことになります。心性は興福寺の塔頭四恩院にゐた人です。中世初頭に於ける心性版法華経の普及は、想像にあまりあるものであはありませんか。日蓮聖人はこの心性版の版経を入手せられたものと見られます。現存の心性版の各版と註経の版経を比べますと、文字面の高さや行間の寸法も全く同じであり、字劃、字体も共通です。たゞ現存心性版に、寸分違はずぴつたり合致する版は見当りません。これは覆刻による微細な相違です。弘長三年第四度版はいくぶん文字が太目です。(巻頭写眞参照)ですから、第三度版以前の心性版の刊記を省いた摺写本が日蓮聖人書入本註法華経の版経であらうと推定され、心性の第一度から第三度までの中のどれかの版であると見て間違はないと思はれます。

註経には法華経八巻のほかに、開結二巻が具してあます。開結の版経で刊記の有る鎌倉時代のものは嘗て見聞したことがないので、何版といふことは私には不明です。春日版々式の開結版経は心性第四度版伝本にも一具の本として備はつてをり、その他にも鎌倉時代と見られる版を度々見うけることがありますが、その開版した人はわかりません。たゞ開結も鎌倉時代の春日版であるといふ概念的なことしかわかりません。

身延、中山の關係

——特に祈禱経及祈禱相伝書について——

影山堯雄

一、祈禱経について

1、宗祖御直筆の祈禱経と転写本

宗祖が文永十年正月廿八日佐渡に於て最蓮房に御與えになつた事はその送状によつて知る事が出來るが、その直筆が未だに見出されていない、たゞ甲州下山本国寺所藏の、天正三年七月十三日身延日叙師が写された原本となつたものが直筆であつたようにも思はれるけれども、それ以外には発見されないのは甚だ残念である。

祈禱経の転写本は室町のものが各地に見られるが、その中で今までに発見された最も古い写本は越後村上経王寺所藏の、常宣坊日體師の所持本であろう、その奥書によると、嘉吉二年霜